

## 娘・母関係の物語

—娘・母関係のタイプと依存-自立の問題—

山 田 英 美

### はじめに

子どもが両親との間で愛憎の心的葛藤を体験しながら、幼児期後期から自分のなかに男性性、女性性を獲得・形成していくことは、フロイトのエディプス・コンプレックスとしてよく知られていることである。母親と同性として生まれた娘が、両親との関係の中で抱く葛藤は、同じくギリシャ神話から採名してエレクトラ・コンプレックスと名づけてはいるものの、フロイト自身が男性であるがゆえであろうか、男子の場合ほど克明な分析的記述はされていない。親との心理的關係は、男児が愛着対象の母親をそのままにしておけるのに対して、女兒は、エディプス期に愛着対象への感情の質的転換を迫られる、つまり父親の愛を獲得するために母親と無意識裡に張り合わねばならないので、男子の母親に対するそれに比べてはるかに深刻になりうる可能性が高いのではないかと筆者は考えているが、その場合、母親の心的成熟度によっても娘・母の關係は微妙に揺れ動く。

子どもの自立的成長は、愛着対象から無条件に愛されるという確たる体験を基盤にして、行きつ戻りつしながら達成されるものであって、それは万人にとって重要な生涯の課題の一つであると言ってもさしつかえない。むしろ、個人はそのライフ・ステージで親以外の多くの人との關係を結ぶ体験をしていくのであるが、關係の結び方が親との關係のなぞりであったり、親を反面教師としてのそれであったりする場合が多いことに気づくだろう。“自立”の形成は、自我の成長とともにどんな關係が親との間に編

## 娘・母関係の物語（山田）

まれるかによって、さまざまな経路を辿っていくのである。

本稿では、このことに関して二種類のアプローチをおこなう。一つは娘が、同性の親である母との関係を自立をめぐるどう認識し、どう行動するかということに対して、青年期後期に位置している女子学生にたずねた資料をまとめ、その類型を見る。二つ目は、母との関係に大きな葛藤を抱きながら生涯かけて自立を達成したと考えられるケースと、死ぬまで解決を見ることができなかったと思われるケースを、その自伝的なあるいは伝記的な資料から掘り上げて比較論考する。

### 第一部 女子学生における「母との関係」の認識調査<sup>1)</sup>

#### 1. 目的

母親との関係を見直す時期にある女子学生が母親をどう見ているか、また娘としての自分の態度をどうとらえているか、また自分にとって母親からの精神的自立とはどういう状態だと考えるか等について、アンケート調査によって実態を探り、母親の態度に対する認識と母に対する自分の気持ちや態度をクロスさせて娘・母関係のタイプを把握することが目的である。

#### 2. 方法

調査内容…記述式を中心にして yes/no 回答式を織り交ぜた質問紙（巻末資料参照）

調査期日…2003年10月～11月

回収率…77%

回収実数…甲府市内の大学生67名、短大生2名、専門学校生11名  
計80名

### 3. 結果

#### 1) 娘・母関係のタイプ分類

母親の態度（娘が認知していること）をY軸にとり、娘としての自分の気持ちや態度をX軸に、肯定、否定の意味合いを汲み取って分類したものが図1である。

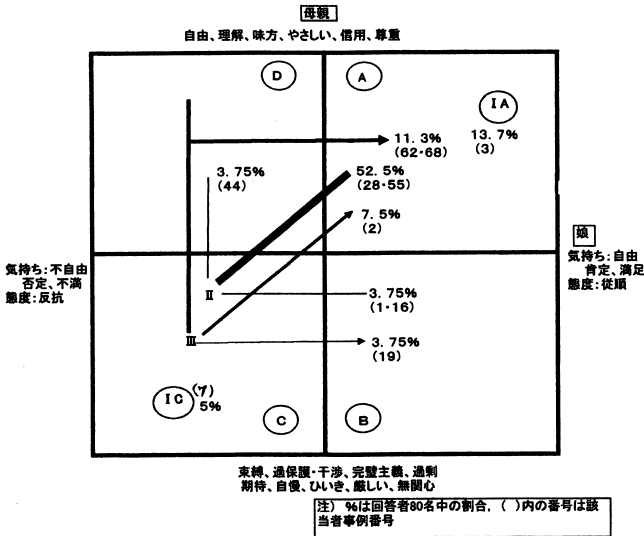


図1 女子学生80名の反応タイプ

それぞれの座標を右上から時計回りに①, ②, ③, ④としてプロットしてみると、I（固定型）、II（両価型）、III（移行型）のタイプに判定できた。この3つのタイプの中でさらに領域別に〈自分に対する母の態度の認知〉〈自分の思い、態度〉〈母親からの精神的自立をどう考えるか〉の三点について読み取った結果、特徴が一致する領域パターンをまとめたところ、以下の（ ）内に示すような8パターンに分類された。

## 娘・母関係の物語（山田）

タイプ           （領域パターン）

I＝固定型   （A領域、C領域）

II＝両価型   （C-A領域、C-B領域、C-D領域）

III＝移行型   （C→A領域、C→B領域、C→D→A領域）

### 2) 娘に対する母親の態度キーワードと表現した延べ人数

- ・味方をしてくれる           …40人(50%)
- ・束縛する                   …24人(30%)
- ・過保護である               …19人(24%)
- ・完璧を要求する           …16人(20%)
- ・娘のことを人に自慢する…12人(15%)

### 3) 娘・母関係のタイプ・領域パターンと自立感

「あなたは どうしたら母親から精神的に自立したといえると思いますか」という質問に対する回答は、表現の巧みさの差によって伝わってくるニュアンスが異なる面もあり、娘・母関係のタイプおよびパターンと一義的な関連を見いだすのはむずかしいが、記述内容はそれぞれに興味深いものであった。山田・工藤<sup>1)</sup>は、3つのタイプの8領域パターンに位置する回答の中から任意に取り出した11例（カッコ内の数字は回答者番号を表す）に関して、次の三点について比較している。①自分に対する母の態度の認知 ②自分の思い、態度 ③母親からの精神的自立をどう考えるか

I型A(3) …①娘のやりたいようにさせ、それをサポートする母。②嫌いなところは全くない。母親の子育てを参考にしたいと考えている。③自分も母となり、自分の子どもと接することをおぼえたとき。

I型C(7) …①弟ばかりをかわいがり、長女である自分を頼りにして子ども扱いをしなかった母。「家事をどうして私がしなければならないのよ」

と嘆く母。娘のプライバシーを守らない母。②姉弟を平等に見てくれなく  
てさびしく、母親に反発した。もっと子どもとして見てほしかった。母親  
に相談しないで物事を決める。父の影響を受けていると感じる。③経済的  
自立。

II型 C-A (28) …①娘のことをいやに詳しく聞いてくるが、自分の思い  
通りにしていいんだよと言う母。②母の子育て・教育を、もっと厳しくし  
たほうがよいと感じ、自分は子どもをわがままな子に育てたくないと思っ  
ている。母の明るいところは好き。③苦しいときに頼ったりしなくなっ  
たら。でもムリだと思う。

II型 C-A (55) …①娘を束縛し、人に自慢し、過保護で根掘り葉掘り聞  
き、完璧を望み、落ちこぼれることを嫌う厳しい母親。自分（母自身）の  
ことを一番に考えるが、味方をしてくれることもある。弁当を作らないこ  
とは一度もなかった。②子どものころには十分接してくれて満足していた。  
今はもう少しはなれて見守ってほしい。落ちこぼれずに人並みにという母  
の希望に対して可もなく不可もなくやってきた。母親に相談せずに物事を  
決められるが、事後報告になりケンカをすることもある。③お互い本音を  
言い合えたら。

II型 C-A (16) …①一人娘に期待をし、娘を自慢し、過保護で子離れで  
きない母親。②そんなに期待してほしくなかったが、今のところ母親の望  
む職をちゃんと持って自立した人になっている気がしている。結婚願望が  
あまりなく、子どもはほしくない。③心のよりどころがお互いの存在以外  
にあること。

II型 C-B (1) …①成績で完璧を望み、子どもに期待する教師的である母  
親。②母親の望むまじめで自慢できる子どもにならないよう外見を派手に  
し、しかし勉強はがんばるギャップのある人になろうとした。③親の意見  
を聞いたうえで自分はどう思うかを確実に断言できて行動できたら。

Ⅱ型 C-D (44) …①娘の味方をしてくれ、好きなようにさせるが無関心な母親。かわいらしいところがある母親。②母親はもっと言うべきことを強く言っているいろいろなことを幼いうちから気づかせてほしかった。『○○ちゃんみたいになれ。』と言われたのはいやだった。③母親のイデオロギーから解放されたとき。

Ⅲ型 C→A (2) …①勉強に厳しく周りの目を気にする母親。②以前は自分のことを理解して黙ってみてほしいと思っていたが、現在は母親が変わり理解してくれていてうれしい。③自分の考えをすべて素直に言えるようになったら。

Ⅲ型 C→B (19) …①子どもの自由にさせてくれたが、仕事が忙しくかまってくれなかった母親。②子どものころはもっと話を聞いてほしかったが、今は母親の仕事を尊敬しているし、仕事をしている姿が好きで、仕事をしていてくれてよかったと思っている。娘は母と同じ看護の道に進もうと思っている。③大事なことを相談しなくなったとき。でも子どもは大人になっても子どもなので、精神的に自立することはあまりないと思う。

Ⅲ型 C→D→A (62) …①自立していて放任の母親。仕事で娘にさびしい思いをさせた母親。②小学校低学年のころまでは母親が働いていることがさびしかった。一緒にお菓子作りなどをしたかったが、今はもういいと思っている。母親に好きなようにしてくれといわれていて、娘は好きなようにした。③いちいち全部話さない→自分で考えてから行動するようになれば自立していると思う。

Ⅲ型 C→D→A (68) …①味方をしてくれて好きなようにさせてくれる母親。②子どものころは『お姉ちゃんだから…』と言ってほしくなかったが、今はそれを言うのは当たり前だと思っている。母の子育て、教育の仕方は最高と思い、母親に感謝している。③ずっとできないと思う。母は母であり心の支えだから。

#### 4. 考察

図1に見るように、母の態度と自分の気持ちがいずれもネガティブ×ネガティブ（C）とポジティブ×ポジティブ（A）の相反する両領域にまたがっている人（タイプⅡ）が過半数を占めているという顕著な結果が得られた。これは、二十歳前後の女性が母の行動を両面的に見、その関係は葛藤的なものを含んでいるという注目すべき実態である。

結果の2）が示していることもそれを裏付ける。自分に対する母親の態度をどう認知しているかに関する問いの自由記述に『根掘り葉掘り娘の言動を確かめ束縛するのはいやだが、好きなようにさせてくれることも多く、味方をしてくれるから嬉しい』というような一見矛盾する内容が多いのである。詳細に読むとそれぞれのライフ・ストーリーの中で見られる矛盾記述の絡み具合は、それぞれのパタンでニュアンスがかなり異なる。とは言え、どのパタンにおいても母親に対するアンヴィパレント（両面価値的）な感情と態度で関係が推移していることはまちがいない。

このことは娘としての自分の態度にも自我の成長にともなう両面の変化があって、娘と母は互いにさまざまに連動して揺れ動くことが現れていると見られよう。

3番目に多い移行型（タイプⅢ）のうち、（C）から（D）を経て（A）に行きつくパタンは、かたくなな反抗的な子ども心は、母の態度の変化によってもなかなか溶けていかないものだが、学生として生育家族を離れることで物理的な距離を得ている今、ようやく自分の気持ちも穏やかになり始めている様子を示している。これはⅡタイプ（C-A）の揺れ動きが幸せな経過を経て関係を安定させたタイプと見てよいであろう。逆のルートをとるというケースは見られなかったが、それはよほど例外的なことではないかと思われる。

固定型のうち、C領域に固定している事例を見ると、3歳下の弟ばかり

## 娘・母関係の物語（山田）

をかわいがり、長女である自分を頼りにして子ども扱いをしなかった母。娘のプライバシー無視の母。それらはある意味では子どもの人権侵害である。そのような態度を示す母に反発した。甘えさせてもらえずさびしかった。母には相談しないで物事を決める。父との距離のほうが近いと感じる。と述懐し、調査時現在も変わっていない。このパタンの娘は、心情的なことよりも経済的に頼らなくなったら自立できると考えるケースが多いようである。

アンケート記述に散見する親の態度のなかで、娘が耐えられないのは『無関心でいられること』である。介入的におせっかいを焼かれることもいやだが、それは自分に向いている母の眼があることの証でもある。母親は男女の子どもがいれば異性の子ども（息子）のほうに接近しやすい。C領域固定パタン（7）の事例が言っているように『弟と同じように子どもとして見てほしかった』という思いは、母親自身に成熟的な問題が未解決である場合には、同性の子どもがのびのびと子どもらしくあることが許せないという自分の問題が出てきてしまう。虐待の種類でも『ネグレクト』が男女を問わず子どもに深い傷を負わせることと根は同じである。このパタンの娘が母との関係をめぐる問題をのりこえていくには時間とエネルギーが要るだろう。

Aの領域に固定しているケースは、この調査では13.7%で2番目に多い結果であった。仲のよい母と娘、友だち母娘、などと呼ばれるような関係にあると娘たちは認識している。結果3)の分類の手がかりとした三点について見ると、母親が明るく振舞ってストレスを与えず、母親のきれいな所はまったくない。娘は抵抗なく母親をとりいれ、母親にとってもいい子であった。娘は自分が母親になったときに同じように子どもを育てたいと思っている。子と母相互の自立の問題は表面化してこない。しかし喜んでばかりもおれないのがこのタイプである。分離や自立は波風を立てせるも



## 娘・母関係の物語（山田）

のであるが、それがないと進歩がない。また時には母親が取り込んでしまう一卵性双生児型母子と名づけられる共依存の傾向が見られる場合もあり、将来その均衡が娘の恋愛や結婚等によって破られたときには問題が複雑かつ増幅する可能性も高い。まだ人生半ばにも至っていない年齢層の対象群なので、固定型の中には、この後の娘・母関係のドラマの中に変化が見られる場合と変わらない場合があるだろう。どちらが幸せかは、まさにそれぞれの人生路のドラマである。

さらに3)の結果から伺えることは、娘にとってこの時期の葛藤の最たるものは自立の欲求と依存の欲求のせめぎあいである。娘の場合は、“母探し”の旅をしながら“自分探し”をしなければならないのだ。認める母と認めない母と。ぶつかり合い、反発し、あきらめ、承認を得、謝罪し、感謝し、賞賛や激励をうけるなどの相互の行為にともなって、哀しみと喜び、愛と怒り・憎しみ、安らぎと不安といった、両極の感情を共有する親子の関係は、真剣に対峙することを避けていたり、あるいは反発し距離をとろうともがいている間は自立と依存の葛藤を解決できていないときである。修羅場を経て両者が変化し、ふたたび歩み寄りを始めたときに—それは実は次元を異にする新たな依存関係の構築であるが、そのとき初めて真の自立の兆しが見えるのだと私は考えている。

## 第二部 自伝、伝記等から娘・母関係を見る

母との「ねじくれた」関係をひとり自分だけの特殊なケースと考えて悶々とした日々をすごす娘が多いのではないかと思う。自分がまさにそうだったと、絵本「百万回生きたねこ」<sup>2)</sup>の著者である佐野洋子は、自伝的エッセイ「シズコさん」<sup>3)</sup>のなかで激白している。その佐野は、「一度も好きではなかった」母と、母の最晩年にいたって歩み寄ることができた。互いに詫びあい許しあい、愛しむ感情をもつにいたっている。しかしそれは、夫

## 娘・母関係の物語（山田）

を亡くしてからも四人の子どもたち全員に大学教育をつけさせたような気丈な母は、反発ばかりしていた長女（洋子）に対しては厳しいいやな面しか見せなかったのだが、晩年に認知症が進んで角が取れた穏やかな人格に変化していき、その“呆け”という仮面（ペルソナ）のもとに、実は洋子を一番信頼していたというような感情が素直に表出されるようになって始めて、たどり着いた結果であった。

もう一つの事例としてとり上げたいのは、最後まで目に見えるかたちでは歩み寄ることがかなわなかった娘と母、ロダンの弟子で彫刻家としての天分を発揮したフランスのカミーユ・クローデルの場合である。まずは別々に著わされた資料について読み解いていくことにし、二者の共通点と親子関係状況の違いについてはその中で考察していきたい。

### 1. 佐野洋子著「シズコさん」における娘・母関係

洋子と母シズコの関係は図1にプロットするならば、タイプⅢのC→Aパタンとなる。洋子は4歳のころから母の手にさわったことがないと言う。母と手をつないでもらおうと差し伸べた幼児の手が母の手に触れるかふれないかで、邪険に振り払われたという一発の出来事によって封印されてしまったのだ。母になでられたり抱きしめられたりしたこともなかったという。長じて、自分と同じような怒りや恨みを母親に対していただいている友人が「ときどき母の首をしめたくなる」と言ったときに、洋子は驚く。絞め殺すには首に直接手をあてがわねばならない。そんなこと私にはできない。私は母の首はおろか、手にも触れることができないできたのだから…と。

洋子は決して臆病な子ではなかった。辛いことにも根を上げず、父親がたばこを吸おうとする気配があるとさっと灰皿やマッチを持ってくるというような気が回る子で、父には気に入られる娘だった。それゆえ、ます

娘・母関係の物語（山田）

ます母親は小憎らしくなり虐待といわれるに近い態度をとり続けた。洋子はその虐待に耐え、それ故に悲しみは憎しみに変わっていったであろう、激しい反抗期が続いた。経済的にも力の上でも洋子が母より優位に立った頃、弟の嫁とうまくいかなくて追い出された年老いた母親を高額有料老人ホームに入れる。認知症がずんずん進む母がそこに13年も居続けることになろうとは予想しなかったということだが、洋子は母を「金で姨捨てした」という負い目を抱く。が、“呆け”による人格変容のおかげで、洋子もそれまでと違った接し方ができるようになり、両者が歩み寄れるようになるのである。そのドラマティックな状況は、次の会話によって不思議なくらい輝いている。

「ごめんね、母さん、ごめんね」「私悪い子だったね、ごめんね」

母さんは正気に戻ったのだろうか。（母はけっして子どもらにも他人にも「ごめんなさい」、「ありがとう」を言わない人だった。）

「私のほうこそごめんなさい。あんたが悪いんじゃないのよ」

私の中で、何かが爆発した。

「母さん、呆けてくれて、ありがとう。神様、母さんを呆けさせてくれてありがとう」

何十年も私の中でこりかたまっていた嫌悪感が、冰山にお湯をぶっかけたようにとけていった。湯気が果てしなく湧いてゆく様だった。

私はほとんど五十年以上の年月、私を苦しめていた自責の念から解放された。……

私は何かにゆるされたと思った。

私はゆるされた。何か人知を超えた大きな力によってゆるされた。……

私は「こころ」というものがあるなら、母さんに対してそれを麻糸でぐるぐる巻きに固く固く何十年も縛りこんでいたような気がする。その糸がバラバラにほどけて、楽に息ができて生き返ったような気が

した。生きていてよかった。……

（「シズコさん」198-200、212-219頁）

赤瀬川原平が表現した「老人力」<sup>4)</sup>（＝「呆ける力」や「忘れる力」）など「マイナスのものが持つ力」に、はからずも娘洋子が救われていく様を見る。母の「老人力」に輝きを与えたのは、洋子の力であろう。洋子は母の「老人力」に摂理さえ感じている。ここに、両者の心のわだかまりが溶けて融合しあい、照らしあい、双方の自立の完成を見ることができる。このときすでに洋子自身は、母が“老人力”を発揮し始めた歳（70歳）に達しようとしていた。歩み寄りへの道はそれほど遠かったのである。

## 2. 湯原かの子著「カミーユ・クローデル」<sup>5)</sup>における娘・母関係

のちに外交官となり、詩人・劇作家としても著名なポール・クローデルを弟に持ったカミーユは、4歳年上の長姉で、自らは幼少の頃より粘土による造形に非凡な才能のきらめきを示した。しかしその時代のフランスでは画家や彫刻家は、良家の娘が手を染めるだけでスキャンダルの種のような扱いしかされず、正当に評価され独り立ちできる社会的なサポート環境はなかった。父親は厳格なしまり屋だったが、子どもたちの才能を伸ばすための教育には理解と協力を惜しまない人だった。パリから百余キロ北東の地にあるヴィルヌーヴの自然と上質の土とによってカミーユは奔放にぐんぐん彫刻の才能を伸ばし始める。

他方母は、生後間もない長男を亡くした後、生まれ変わりを期待したにもかかわらず女兒だったということで、カミーユという男女どちらにでもつける名前をつけて葛藤をあらわにするほど、誕生の当初から娘を心理的に遺棄した。古風な伝統的価値観に固まった女性であり、娘カミーユが美貌に恵まれ反抗的かつ自由奔放にふるまう行動の裏側の悲しみにはまったく気づこうとしない。カミーユはきょうだいの中では、同じような豊かな

娘・母関係の物語（山田）

感性をもった弟ポールとは、芸術をめざす同志の一種の共犯意識で結ばれて特に仲がよかったが、母に溺愛される平凡な2歳年下の妹（母はこの次女に自分と同じルイズという名を与えた）とは当然のこととして反発しあう。18歳の時カミーユは生来の一途な激しいやり方で家族を強引にパリに移住させてしまう。父親ルイ・プロスペル・クローデルは、勤務地を離れられず不便な単身赴任の形をとるほどに、子どもたちの才能を伸ばすことには絶大な協力をした。パリで、みずみずしい娘盛りのカミーユは彫刻家ロダンとの宿命的な出会いをしたのだった。この出会いはカミーユの彫刻を花ひらくべく力を与えるものであったが、ロダンも彼女から多くのインスピレーションを得て次々と作品を生み出し、二人は逃れられない複雑な関係にからめ捕られてしまう。

湯原かの子は上掲書で、カミーユの人生を“悲劇的”ではあるが愛の極限を生きたとして“悲惨さ”はないと断言している。しかしロダンからもすてられ、48歳で家族によって強制的に精神病院に隔離された時点でカミーユのころも才能もぷつぷつと世間から抹殺されてしまった。以来30年という年月を、カミーユはひたすらロダンと彼を取り巻く有象無象の輩がいれば毒を塗った紐で自分をぐるぐるに巻きつけるというような妄想に縛られて、病院の周りの豊かな自然や彼女の天才的な造形表現能力はそのころにかけらの慰めも与えず、ひたすら心象風景の故郷ヴイルヌーヴをおもいえなくことと母の愛の渴望に長い年月を費やしたのだとすると、涙無しでは語れない。それがかなり重いパラノイア的狂気のなせる業であるとするならば、狂気のエネルギーが彼女を生きながらえさせたというべきであろうか。私には、彼女の人生におけるこの30年間の日々の方に、重苦しいが強く惹かれるものがある。

彼女が精神病院に連れ去られたあと、荒れたアトリエの壁に残されていたというキリストの十字架の道行きを描いた絵は、キリストが人類のため

に背負った贖罪であった。それに自分のつらい人生を重ねたものではないかといわれている。病院における孤独と苦しみに充ちた日々も、贖罪と考えて耐えることができたのではなかろうか。だがいったい何に対する贖罪だろうか？一つにはおそらく不当に低い評価しか与えない理不尽な社会の不正に対して身を挺する“いけにえ”の意識であり、さらには自責の念—母の愛を渴望しつつ得られないことへの恨みに起因する自らの反抗的態度への—による償いの意識である。前者のほうは、妄想的に拡張されたものでなければ前衛的な先覚者としての意義が認められたであろうが、哀しいかな病者の嘆きと齒噛みとして無視されつづけてしまった。そしてもう一つのほう、カミーユは母に詫び、愛を送り、歩み寄りうともがいたが、かたくなな母の心を溶かすことはかなわなかった。そればかりか、せめて故郷にちかい病院への転院を切望する手紙に対しても、母は強固に反対し、最も遠く離れた地に追いやっておく方策を練ったのである。うわべの心遣いの食料などを送ることによってカミーユを狂喜させることはあっても、溝は決して埋められておらず、その感情のずれこそが終わらない悲劇であった。母も妹ルイズも死ぬまで一度も、南仏にあるモンドヴェルグ精神病院で生きているカミーユを見舞っていない。

弟ポールや旧知が見舞ったおりには消息を伝えているが、写真に残る晩年のカミーユは、輝きの失せたうつろな、それでいて苦々しく口をゆがめた表情の老女である。その写真と、美貌と深い知性をみなぎらせた若い頃の写真を見比べるときは“悲惨さ”を感じずにはいられない。

ただ、湯本が上記伝記的著書の冒頭で伝える老女カミーユの日常に、病院付属の教会のミサに毎朝与り祈る姿があったという一文によって、彼女が最終的にはゆるぎない依存の対象を決して得なかったとは言いきれまいと思う。それは、神のみぞ知るカミーユのこころの内側である。それが彼女の後半生を想いえがく者にとっても救いであり、事実、彼女は神の慈愛

によって後世にも生きつづける人になりえたのではなからうか。

佐野洋子の場合と比較したとき、カミーユとその母の悲劇は、彼らが相互に依存する能力、すなわち真の意味での自立を現世にあるうちに育くみえなかったことにあると言えるのではなからうか。

## まとめ

本稿の第一部では、現代の女子学生における娘・母関係意識を調査による資料でタイプわけしてとらえることを試みた。第二部ではその類型からするとⅢタイプのC→Aにあたる佐野洋子の自立への道と、ⅡタイプC-Bに相当すると思われるカミーユ・クローデルの場合を娘・母関係という視座から自伝や伝記資料によって読み解こうとした。

人生の四分の一くらいしか生きていない20歳代の女子学生にとっては、まだまだそれぞれの娘・母関係は動いていくであろうし、彼らが「母からの精神的自立とは？」ときかれたときに、「生涯にわたって母は母なので、精神的自立は考えられない」と述べている人がかなりいるように、依存と自立の問題は懐が深い。

依存と自立はいずれも本来的な欲求である。それは「いないいない・ばあ」ということと置きかえてもよく、自立（いないいない）がないと発展がないが、一步踏み出す前に安定した「いるいる」の状態が前提として必要であり、何度も行きつ戻りつ確かめながら「練習」を重ねて歩んでいくものである。その際に娘の動きに揺り動かされる母があり、その母に対する両価的な感情も生まれる。また、前提条件である土台の確かな感触がないと人はムリに自立のポーズを装うこともあるが、それは結果的に罪悪感が付きまとう反抗のための反抗であったり、横滑りに他の依存対象（たとえば異性）によって欲求を充たそうとする、不健全な関係の形成を急ぐことになったりする。それほどまでに子どもは、親との関係を軸に生きてい

## 娘・母関係の物語（山田）

く宿命を負う存在なのかという思いを強くさせられる。

本稿第二部でとりあげた先達二人の娘・母関係を見るときにも、土台のところの母との関係の重さを、ふたたび三たび突きつけられるのだが、土台にどんな問題があろうとも、それをばねにして生きていく人の人生ドラマこそおもしろいかもしれない。

### 引用文献

- 1) 山田英美、工藤奈津子 「娘・母関係と自立の問題(2)」 山梨小児保健協会 やまなし小児保健 第23号 2006年【調査：工藤奈津子「母娘関係と自立の過程」平成15年度山梨大学教育人間科学部卒業論文（未刊）】
- 2) 佐野洋子 「百万回生きたねこ」 講談社 1977年
- 3) 佐野洋子 「シズコさん」 新潮社 2008年
- 4) 赤瀬川原平 「老人力」 ちくま文庫 2001年
- 5) 湯原かの子 「カミーユ・クローデルー極限の愛を生きて」 朝日文庫 1992年

### 参考文献

- ・宮本忠雄「彫刻の光と影ーロダンとカミーユ・クローデル」こころの科学 no.4 評論社 1985年
- ・読むブリジストン美術館
- ・ARTS MAGAZINE 2008年5月号
- ・Camille Claudel LE FIGARO



娘・母関係の物語（山田）

資料

〈質問紙〉

◎ このアンケートは、こころの環境としていちばん身近な「母親との関係」についてお尋ねするものです。ありのままをお書きくださるよう、おねがいます。

- |                                  |  |          |
|----------------------------------|--|----------|
| 高校時代<br>まで<br><br>現在             | 1、あなたの母親はどんな人だったと思いますか。各項目について <u>yes</u> か <u>no</u> に○をつけ、どちらともいえない場合は△を書いて下さい。またコメントがある場合は右の空欄に書いて下さい |          |
|                                  | a あなたを束縛することが多かった  | yes / no |
|                                  | b あなたのことを人に自慢することが多かった   | yes / no |
|                                  | c 過保護の傾向が強かった  | yes / no |
|                                  | d あなたのことをよく知りたがり、ねほりはほり聞いた   | yes / no |
|                                  | e あなたの成績や習い事などで完璧であることを望んだ   | yes / no |
|                                  | f あなたの味方をしてくれることが多かった  | yes / no |
|                                  | g 色々言わないであなたの好きなようにさせてくれることが多かった   | yes / no |
|                                  | h あなたのすることに無関心なことが多かった   | yes / no |
|                                  | i あなたと張り合うようなことがよくある   | yes / no |
| j あなたを頼りにしたり、相談したりすることが多い        | yes / no   |          |
| k あなたと洋服やアクセサリーなど持ち物を共有することがよくある | yes / no   |          |

2、母親の嫌いなところ

3、母親の好きなところ

4、子どもの頃、母親にもっとこうして接してほしかったというところ

[ ]

今、その気持ちに変化はありますか

[ ]

5、あなたと母親の似ていると思うところ

[ ]

それについてどう思いますか

[ ]

6、あなたは母親と同じような生き方を選びたいですか。次のことについて母親はどのようだったかを書いて、同じようにしたいかお答え下さい。

・母親が結婚した時期はいつですか (例)短大を卒業し、2年働いた22歳の時

(

自分は ( )

・母親はどのような相手と結婚しましたか ( )

学歴、職業、性格 等について

娘・母関係の物語（山田）

- 自分は（ ）
- ・母親は恋愛結婚、お見合い結婚のどちらですか（ ）
  - 自分は（ ）
  - ・母親は結婚退職か育児退職をしましたか。\*母親が仕事を持っていた人のみお答え下さい。（ ）
  - 自分は（ ）
  - ・母親はどちらかの親と同居しましたか（ ）
  - 自分は（ ）
  - ・母親の子育て、教育の仕方はどうですか（ ）
  - 自分は（ ）

7、子どもの頃、母親は家庭外で仕事をもっていましたか yes / no

a 子どものあなたはそれをどう思っていましたか

{ }

b 今のあなたは働く母親になりたいですか

{ }

8、母親から言われて印象に残っていることは何ですか

a 良かったこと、嬉しかったこと

{ }

b 嫌だったこと、ショックだったこと

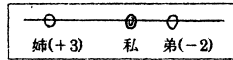
{ }

9、他の兄弟姉妹と母親との関係はあなたと比べてどうですか

a さようだい構成は

[ ]

例 \*カッコ内は私との年齢差



b 母親から一番期待されていたのは誰ですか（ ）

c 母親が一番気を許していたのは誰ですか（ ）

10、母親はあなたにどんな人になってほしいと思っていましたか

{ }

それに対して子どものあなたはどうしましたか

{ }

娘・母関係の物語（山田）

- 11、あなたは母親に相談しないで物事を決めることができますか  
進路、就職、大きな買い物、アルバイト、新しいことを始める等について
- 12、何かを判断する時や考える時に自分の考えは親の考えだと感じることはありますか **yes / no**  
yesの人はどんな時ですか
- 13、中学・高校時代に母親とどんなことでけんかをしましたか
- 14、母親とけんかをした時はどんなふう仲直りをしましたか
- ⑮ あなたはどうしたら母親から精神的に自立したといえると思いますか

\*以下は参考のために父親についてお答え下さい。

- 16、あなたの父親はどんな人だったと思いますか。各項目について **yes** か **no** に○をつけ、どちらともいえない場合は△を書いて下さい。またコメントがある場合は右の空欄に書いて下さい。
- a あなたの勉強や学校での生活に関心があった **yes / no**
- b 母親と協力して家事や子育てをしていた **yes / no**
- c 子どもの頃、叱るのは父親の役目だった **yes / no**
- d 厳しい父親だった **yes / no**
- e あなたに甘く、よく小遣いをくれたり物を買ってくれたりした **yes / no**
- f 子どもの頃、よく一緒に遊んでくれたりどこかに連れて行ってくれたりした **yes / no**
- g 中学・高校時代に父親と話すことは少なかった **yes / no**
- h あなたが中学・高校時代までの父親は子どもと接することが少なかった **yes / no**
- i 母親との仲は良かった **yes / no**

- 17、父親と他の兄弟姉妹の関係はあなたと比べてどうですか
- a 父親から一番期待されていたのは誰ですか ( )
- b 父親が一番気を許していたのは誰ですか ( )
- 学校名( ) 学科( ) 学年( )
- 自宅 / 下宿